別冊Ｉメイト便り第 19 号

Ｉメイト交流の愉しみ

ーアジ風に乗ってＩメイト交流はひろがるー

特集：平和を希求する日本の民の心

NPO 法人 アジアの新しい風

〒 154-0016　東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414
TEL/FAX　03-5426-6714　http://www.npo-asia.org

2023 年 10 月 10 日　発行

目　次

まえがき　OBOG 事務局担当・副理事長　上　高子　・・・3

1．課題詩３編

・与謝野晶子　「君死にたもうことなかれ」　・・・・・　4
・茨木のり子　「わたしが一番きれいだったとき」　・・・・・　5
・2022 年平和記念式典　「平和への誓い」　・・・・・　6

2．コンテスト受賞３学生

・タマサート大学　カーンシリー・ピティパット　・・・・・　7
・清華大学大学院　金　佑真　・・・・・　8
・UNPAD　アリサ ソフィア プラダニ　・・・・・　9

3．元Ｉメイト学生（OBOG）

・清華大学　鐘　希君　・・・・・　10
　施　奕敏　・・・・・　11
・タマサート大学　シワポーン・テッパラット　・・・・・　12
　パラウィ・マスック　・・・・・　13
・貿易大学　ド・アイン・トゥ　・・・・・　14
　ライ・ティ・ジュエン　・・・・・　15
　ド・ティ・トアン　・・・・・　16
・UNPAD　アウリア リフキアナ アジクリ　・・・・・　17
・架け橋グループ　高　楊　・・・・・　18
　ジャン・ミャオ　・・・・・　19

4．Ｉメイト学生

・清華大学　馬　紫晗　・・・・・　20
・タマサート大学　シャノンヤー・キーラー　・・・・・　21
　シャリサー・メーターピスイット　・・・・・　22
・貿易大学　ダオ・ティ・ミン・グエット　・・・・・　23
　グエン・トゥ―・アイン　・・・・・　24
・UNPAD　シリュ プラメスワラ　・・・・・　25
　ブレンダ アプリッシラ パウル　・・・・・　26
　アプリリア ヌルマウリ　・・・・・　27
・架け橋グループ　高　宇萱　・・・・・　28

＊ UNPAD はパジャジャラン大学
＊架け橋グループは清華大学大学院生

5．学生会員

小林　透子　・・・・・・　29
志村　真帆子　・・・・・・　30
段　安苗　・・・・・・　31
汪　極超　・・・・・・　32

6．鷗友学園女子中学高等学校　・・・・・・　33

7、編集後記　理事・Ｉメイト交流担当　奥山　寿子　・・・36
正会員　編集担当　原谷　洋美

まえがき

OBOG 事務局担当・副理事長　上　高子

昨年２月、ロシア軍がウクライナへ侵攻したとのニュースに、驚愕しました。まさかまさかに、どう対応していいか、正直うろたえました。当然会員へ反戦のメッセージを、と思いましたが、交流校の属する国のスタンスはさまざまで、政治的中立を旨とする「アジアの新しい風」（以下アジ風）は、慎重にあるべき、という意見もありました。

そんなときアジ風の定款に、設立目的が「多文化共生社会の実現を目指し、アジアの平和とひいては 世界の平和に貢献すること」であると明記されているのをあらためて確認した次第ですが、２０年前の設立時にはこのような事態を予想していなかった、と率直に認めます。

すぐ終わるであろうと思われたこの戦争も、いまだに続いていて、世界中に大混乱を起こしています。アジ風はこの事態にどう対応するか、創立２０周年を目前に課題をつきつけられました。そして決意しました。今年２月の新春交流会では、設立目的にふさわしいイベントを、と「平和を希求する日本の民の心」というテーマを打ち立て、交流校対抗の朗読プレゼンテーション大会を企画した次第です。課題詩を選ぶ過程でも、懸念はありました。「日本の民の心」を外国の若者が理解して、朗読できるのであろうか、先生方はどう指導されるのであろうか。しかし、結果を見ると私たちの懸念は杞憂であったように思えます。

７月には、入賞者３名を日本へ招へいして、記念イベントを開催し、課題詩の朗読を再演してもらいました。そして、オンライン傍聴や、動画のデータを基に、Ｉメイト学生と元Ｉメイト学生の皆さんから、また日中の学生会員と鷗友学園の中高生から、感想を募集しました。その総集編がこの冊子で、「アジアの若者を育てる」というアジ風の目標をあらためて認識しています。

ほぼ、どの原稿にも書かれています。戦争を防ぐには「異なるものへの思いやり、コミュニケーションを通しての異文化理解、お互いの共感が必要」と。アジ風の活動はその目標に向かって進んでいるのか、と問いかけられていると感じました。少なくとも、この冊子に応募してくれた学生たちは、パソコンに向かい考えをまとめているとき、「なぜ戦争は起きるのか、自分はどうしたらよいのか」と考えるきっかけになったと思います。私個人は清華大院生の金佑真さんが、「例えどんな時代に生きていても、どんな規則に囲まれていても、自分自身を知り、自分の心を知り、勇敢に自分の気持ちを語ることができる人に私は憧れています」という言葉に心を動かされました。

戦争のみならず、あらゆる事象において、今、世界は変革期を迎えていると思います。自国の利益のみを追い求めるのではなく、あるいは既得権益にしがみつくのではなく、人類は運命共同体であると認識のもと、地球全体の利益を求め、温暖化や人権侵害、貧富の格差など共通の敵に向かって共に戦うべき時です。最近出会った言葉「何も反対の声を上げないことは、肯定したことになる」を心に刻んで、自分の主体性を確かにしたいと思うこの頃です。

最後に、元Ｉメイトと現Ｉメイト会員の皆さんへ。学生たちの日本語表現の修正とコメントを有難うございました。これからも相互理解のよい交流が長く続きますよう、願っています。

君死にたもうことなかれ

与謝野晶子（歌人）

ああ、おとうとよ、君を泣く、
君死にたもうことなかれ、
末に生まれし君なれば
親の情けはまさりしも、
親は刃（やいば）をにぎらせて
人を殺せと教えしや
人を殺して死ねよとは
二十四までを育てしや

堺の街のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたもうことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたもうことなかれ、
すめらみことは、戦いに
おおみづからは出でませね、
かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは、
大みこころの深ければ
もとよりいかでおぼされん。

ああおとうとよ、戦いに、
君死にたもうことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまえる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守り
安しと聞ける大御代（おおみよ）も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻（にいずま）を、
君わすれるや、思えるや、
十月（とつき）も添わでわかれたる
少女（おとめ）ごころを思いみよ、
この世ひとりの君ならで、
ああ、また誰を頼むべき、
君死にたもうことなかれ。

わたしが
一番きれいだったとき

茨木のり子（詩人）

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていって
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達がたくさん死んだ
工場で　海で　名もない島で
わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった

わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった
男たちは挙手の礼しか知らなくて
きれいな眼差しだけを残し皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき
わたしの頭はからっぽで
わたしの心はかたくなで
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり
卑屈な町をのし歩いた

わたしが一番きれいだったとき
ラジオからはジャズが溢れた
禁煙を破ったときのようにくらくらしながら
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき
わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん
わたしはめっぽうさびしかった

だから決めた　できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのように、ね

平和への誓い

バルバラ・アレックス　（広島市小６生）
山崎 鈴　（広島市小６生）

あなたにとって、大切な人は誰ですか。
家族、友だち、先生。
私たちには、大切な人がたくさんいます。
大切な人と一緒に過ごす。笑い合う。
そんな当たり前の日常はとても幸せです。

昭和 20 年（1945 年）8 月 6 日　午前 8 時 15 分。
道に転がる死体。
死体で埋め尽くされた川。
「水をくれ。」「水をください。」という声。
大切な人を一瞬で亡くし、当たり前の日常や未来が突然奪われました。

あれから 77 年経ちました。
今この瞬間も、日常を奪われている人たちが世界にはいます。
戦争は、昔のことではないのです。

自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。
本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心をもち、相手を理解しようとすることです。
本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。

過去に起こったことを変えることはできません。
しかし、未来は創ることができます。
悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

今度は私たちの番です。
被爆者の声を聞き、思いを想像すること。
その思いをたくさんの人に伝えること。
そして、自分も周りの人も大切にし、互いに助け合うこと。
世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います。

コンテスト受賞３学生

年をとってから、どんな話をしたいですか

カーンシリー・ピティパット
タマサート大学

皆さんは、年をとってから自分の「一番きれいだったとき」についてどんな話をしたいですか？

私が詩を見た時、この詩の題名、「わたしが一番きれいだったとき」というタイトルがまず目に止まりました。「茨木のり子さんの一番きれいだったときはどんな話なんだろう」、そんな好奇心から読んでみました。「わたしが一番きれいだったとき」、茨木のり子さんのその言葉には、悲しみ、苦しみ、悔しさしかありませんでした。戦争の残酷な話を自分の目線で語っていて、その美しさが戦争の残酷さに散ってゆくような感じがしました。茨木のり子さんは、「戦争で若かった時にするべきこと、できたはずのことを全部失ってしまった」、そんな悔しい気持ちでこの詩を書いたと、私は思いました。

「わたしが一番きれいだったとき」は 1958 年に書かれました。それからもう 65 年が過ぎました。現代の若者たちが年をとってから一番きれいだった時のことを話す時、どんな話をするでしょう。悲しみ、苦しみ、悔しさのない美しい世界の話でしょうか？

残念なことに、それだけではないでしょう。今も、戦争や人々の争いは世界中で起こっています。私が住んでいるタイでも南部で紛争が起こっています。私の友達の一人も南部出身で、慣れてしまうぐらい毎日爆発の音が聞こえていたそうです。平和に暮らしている人がいる中で、苦しい生活で毎日何かを失っている人もいます。それは避けられない現実です。

皆さんは、年をとってから自分の「一番きれいだったとき」についてどんな話をしたいですか？

私は、「私が一番きれいだった時、やりたいことはなんでもできた」、「私が一番きれいだった時、恋をした」、「私が一番きれいだった時、夢のために頑張った」、そんな話をしたいです。それができるなら、どれだけ幸せなことでしょうか。だから、この世界の人たちが年をとってから一番きれいだった時の美しい話を語れるように、誰も茨木のり子さんのように悲しい話を語らなくてもいいように、私はこの世界が少しずつ明るくなって平和になる。そんな日がいつか来るよう、願っています。

Ｉメイトのひと言

トーイさんとは、Ｉメイトとして１年以上メールの交換やおしゃべり会での交流をしていましたが、実際に会うことができ、楽しい思い出となりました。私の会社のオフィス見学をしてもらい、その後、会社の若い同僚も交えて、居酒屋で、大学生活やクラブ活動の話で大いに盛り上がりました。

発表会においては、最初は少し緊張しているようでしたが、発表が始まると普段通りの落ち着いた上手なプレゼンテーションで、ホッとしました。

（大石　純）

勇敢に自分の気持ちを語ることができる人

金　佑真
清華大学大学院 架け橋グループ

この度のコンテストに際し、私は初めて与謝野晶子さんの作品『君に死にたもうことなかれ』を読みました。詩の中に含まれている与謝野さんの弟への思いと、戦争に対しての嫌悪が私に深い印象を残しました。これからは２つの方面からこの詩を読んだ後の感想を話してみたいと思っています。

『君死にたもうことなかれ』と言えば、その中に存在する反戦性や反戦思想に関しての論議は学界の中でずっと話題になっていたそうです。原文を見るとこの詩は、数多くの人々から、戦争に反対し平和を求める作品だと思われています。この作品だけでは彼女の戦争観を表すことができないと述べている批評家もいます。与謝野さん自身によると、『君死にたもうことなかれ』はまさに日露戦争が激しく進んでいる時に彼女の気持ちを真っ直ぐに表現した作品でした。

数年前、24 歳という若さで戦場へ送られた与謝野さんの弟は家の末子として、一番愛されていました。詩の中、与謝野さんは姉としての思い、そして母親と妻の憂さを繊細に描き出し、家族としての悲しみや切なさを読者の目の前に浮かべさせ、私たちの心に触れました。なので私は『君死にたもうことなかれ』は与謝野さんが弟への思いと家族愛､戦争に対する嫌悪を真っ直ぐ、正直に語った作品だと思いました。

まとめてみると、この詩は、与謝野さんが仕方なく戦場へ送られた弟への思いと戦争を嫌だと思う気持ちを表した作品でした。その中に政治観としての戦争観よりも個人的な戦争に対する嫌悪の気持ちがとても強く伝わってきました。また、その嫌悪は大切な人を失う恐ろしさから生まれた強い感情なので強い家族愛も伝わってきます。すなわち､『君死にたもうことなかれ』は特殊な時期に生きている与謝野さんが他人の批判を恐れず、自分の真の気持ちを勇敢に表現した素敵な作品でした｡この詩を読むと与謝野さんの強さと意志の硬さに感嘆してしまいます。

例えどんな時代に生きていても、どんな規則に囲まれていても、自分自身を知り、自分の心を知り、勇敢に自分の気持ちを語ることができる人に私は憧れています。

Ｉメイトのひと言

金さんの発表を通じて、今まさに世界で起こっている「戦争」についてより深く考えるようになりました。明日も明後日も続いていくと思っていた日常を一瞬で消し去ってしまう戦争。こんなに悲しく苦しい出来事はありません。世界が混沌としている今だからこそ国民同士の交流が大事だと感じています。一人一人ができる事は小さいけれど、平和を願う気持ちで国民同士が繋がっていければより大きな力になるのではないかと思います。

（西尾のぞみ）

未来の為に私に出来ること

アリサ ソフィア プラダニ
パジャジャラン大学

「平和への誓い」を選んだ理由は、この文が一番私の心に響いたからです。

第二次世界大戦の時代には、まだこの世に生まれていなかった私ですが、世界戦争については歴史の本で読みました。とても残酷な時代だと一見して分かりました。人々が亡くなり、建物が崩れていく毎日。そんな時代に生き残れる自信は全くありません。

敵軍が落とした爆弾で壊滅してしまった広島。「平和への誓い」は、77 年前に起こった出来事を、今一度思い返し、被爆者の思いを伝えています。まるであの日に、あそこにいたかのように、うめき声が鮮明に感じられ、私の頭の中に浮かぶ、地獄のような景色にゾッとします。

今この瞬間にも、こういう気持ちにさせられる出来事は、世界で起こっています。「戦争は昔のことではない」その通りです。戦争はいつどこでも起こりうる事であり、恐ろしいと感じます。でもただ恐れ、怖いと感じるだけでは、過去に囚われることになります。

過去を変えることはできません。当然なことです。でも今までの私は、いつも後ろを振り返っては後悔するばかりでした。

「平和への誓い」は、過去を忘れず、今こそ、未来のために、できることをやるべきだと伝えていると感じます。これを読んだ今、私も過去に囚われず、自分の未来に向けて、またさらに、皆の未来のためにできることを、全力でやっていこうと決心しました。

Ｉメイトのひと言

昨年 11 月よりアリサさんとの交流が始まりました。アリサさんは最初からしっかりとした文章を書かれ内容が十分伝わっている為、主に“てにをは”の部分や修飾関係の構文など、より自然な日本語の文章になるような修正を伝えていました。

テーマは日本の文化、料理などから始めましたが、今年初め、アジ風 20 周年記念行事の朗読コンテストにアリサさんが参加されることになり、その感想文案の相談を受けました。その後、朗読の練習を島村さんのお声がけでオンラインで顔を見ながら直接アドバイスすることができ、それまでのメールだけのやり取りに比べ、親近感が全然違うと感じました。

更にアリサさんが来日されることになり、私の妻と娘を連れて 1 日都内観光に案内しました。直接会ってみると、非常に気さくな学生で観光をしながら、お互いの家族や日常生活について色々と話しをすることでオンラインの時よりもさらに親近感が深まり、直接会って話すことの効果の大きさを痛感しました。

アリサさんは 10 月から広島大学に留学されると聞いています。何事にも一生懸命に取り組まれるので心配はしていませんが、是非有意義な留学生活を送って頂きたいと思っています。

（千歩　和人）

「歴史」を語る「戦後」

鐘　　希君
アジ風歴５年　北京在住
清華大学人文学院日本語学科修士過程３年

コロナ禍が４年目に入った今、ようやく収束の光が見えてきたが、今度はヨーロッパが戦火に見舞われることとなった。イタリアの哲学者アガンベンが提起した「異常事態」は、長く続く「常態化」になるのではないかと懸念されている。被爆地長崎は８月９日、７８回目の「原爆の日」を迎えた。コロナ禍や分断の危機が世界を覆う中、世界の市民として「平和を希求する」という話題を探求する機会があり、そして、多文化共生社会の実現と平和への貢献を目指しているアジ風の 20 周年記念イベントで議論することも意味深いと考える。

今回の新春交流会では、「異常事態」に対する人々の心配と不安を強く感じた。また、皆さんの発表に共感できるものもたくさんあった。その中で最も印象的だったのは、金祐真さんが取り上げた与謝野晶子の『君死にたまふことなかれ』であった。日露戦争最中に書かれたこの詩は、戦争に対する嫌悪感がしみじみと伝わってくる。

「戦後」の時代に「戦争」の記憶を語ることは、過去を振り返り、歴史を現在の視点で見つめ直す作業である。冷戦後、グローバル化が進み、ここ三十年「平和」が続いており、戦争の記憶が遠い別世界のようなものとなった。ポスト冷戦時代、我々は戦争と平和を相入れない二つの世界として語られてきた。両者の間は対照的でも、平行でもなく、断絶としてとらえられている。しかし、戦争と平和という二つの世界の間は断絶ではなく、複雑な関係性をも併存している。大江健三郎はニーチェを高く評価し、「歴史上の嫌なことを忘却する能力が人間には必要だ、という考え方より、記憶で抵抗するという考えの方が正しい」と語っている。与謝野晶子も、大江健三郎も、記憶によって抵抗を行い、貴重な歴史的証言を続ける一人である。

「平和を希求する」ために、差異、アイデンティティを強調することより、お互いの壁を越える「共感力」を求めるべきではないかと思う。核や憲法九条など戦争と平和をめぐる問題について発言し続けていた大江健三郎は、「日本の子どもは、日本の歴史をまともに学んでゆくだけでいい。そうすれば、まともに育ってゆけます。確信と希望を、僕は持っています」と言っている。与謝野晶子や大江健三郎の言葉の数々を噛み締め、時代の壁、国家、民族の壁を乗り越える「共感力」を探し求めていきたい。そこには未来への希望の光があると私は信じている。

元Ｉメイトのひと言

鐘さんの感想文からは、世界平和を希求する強い思いが伝わってきます。特に「共感力」という言葉に、世界観や個々人の価値観の違いを超える何かヒントが有りそうな気がします。これからの中国と日本を結ぶ懸け橋の一人としての鍾さんの成長が楽しみです。

（西澤　逸実）

異なる文化への寛容な心

施　奕敏
アジ風歴３年　清華大学出身
東京大学大学院修士課程
アジ風第５回奨学生

三人の朗読と話を聞いて、平和に対する新しい見方を感じました。中でもタマサート大学のカーンシリー・ピティパットさんの「わたしが一番きれいだったとき」が最も強く印象に残っています。

平和な時代に生まれた私には本当の平和の尊さを感じることは難しいですが、茨木のり子さんの「わたしが一番きれいだったとき」は、少女の小さな幸せから戦争時代の残酷さをあぶり出していて、心に響きました。

「わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった
男たちは挙手の礼しか知らなくて
きれいな眼差しだけを残し皆発っていった」

私たちにとってごく普通の恋愛話でも、戦争時代の人々にとっては全く違っていたのです。一番きれいだったときに、「自分が若かった時にするべきこと、できたはずのことを全部失ってしまった」、「悲しみ、苦しみ、悔しさしかない」という切なさが胸を打ちます。カーンシリー・ピティパットさんはさらに戦争の影響が現代社会にも及ぶことに触れ、戦争によって家を奪われた人がたくさんいると指摘されています。平和な社会で穏やかな生活を送っている人々にとっても見過ごせないことです。

平和を守ることは多くの人々の願いです。しかし、私たちに何ができるのでしょうか。

ある日本人の先生のオリエンタリズムの授業で、アメリカが広島に原爆を投下した後、アメリカ国民は日本人に対して同情の感情をほとんど抱かなかったということを知りました。その理由は、当時は西洋と東洋のコミュニケーションがほとんどなく、アメリカ人は生活習慣や伝統文化が大きく異なる日本人を理解しようせず、見知らぬ民族を攻撃しても罪悪感に苦しむことがなかったからだということでした。これが戦争の恐ろしさなのです。戦争は、短期間で人々の平和な生活を奪うだけでなく、長期間にわたって人々のつながりを奪います。戦争は人々を分断させ、他陣営の人々を理解し共感する能力を奪います。戦争が終わっても、戦争によってもたらされた心の闇を修復することは難しいでしょう。戦争が絶えず続き、国際情勢が緊迫している今だからこそ、他国に対して寛容な心を持ち、異なる文化を理解し、平和な社会文化を築くために努力することが大事なのだと改めて思いました。

元Ｉメイトのひと言

素晴らしい受賞者の朗読とスピーチでした。施さんの感想文にも述べられているように、このような時代だからこそ、異文化を理解し、共存することの大切さについて改めて思いを致しました。この企画に心より敬意を表します。

（園田　成和）

「わたしが一番きれいだったとき」を語るためには

シワポーン・テッパラット
アジ風歴１２年　タマサート大学出身
東京学芸大学大学院修士修了
大阪府在住　日系企業勤務　賛助会員

第２次世界大戦が終わってから約78年が経ちました。日本は今世界３位の経済大国と呼ばれ、世界平和度指数ランキングで９位取り、外国人の中ではどこに行っても安全な国として有名です。今の日本で生まれ育った子供たちはきっと自分が一番きれいだったときを「一番きれいだった時」らしく語る事ができるでしょう。

しかし、実際にそうでしょうか。全員自分が一番きれいだったときを語る事ができるでしょうか。学校でいじめられた子供たちや職場のパワハラで息苦しい大人やSNSでの誹謗中傷を受けて自殺した人などが平和だと言われているこの社会にはまだいます。その一つの原因は「異なるものへの拒絶反応」だそうです。

戦争も同じです。人間の欲望、異なるものへの拒絶反応で行われました。「自分と異なっているから」という理由で生まれるなら、まずアリサさんが言った「相手を認める思いやりの心」を持つ事が大事です。ただ、その心を持つだけでは足りません。新しい世代を創る子供達に育てなければなりません。

相手を認める思いやりの心の次に持つべきことは「相手への思いを持つ心」も同じく大事だと思います。戦争がない社会で生まれた私たちは戦闘に家族を送られる苦しさ、戦争で家族を失う悲しさ、戦争で失う生きるための希望、それはどんな気持ちかどんなに語られても想像できないと思います。それは私たちにとってとても遠い出来事だからです。想像できない出来事なら、身近なできことから想像してその心を育ていくのです。自分がいじめられたら、職場でパワハラを受けたらどんな気持ちになるかを考える。そうすると、社会問題が少しでも減り、みんなが幸せに過ごせるようになるでしょう。社会問題は個人間の問題から生まれ、戦争は社会と社会の間に生まれるものです。個人間の問題を少しずつ減らしていったら、みんなの心が豊かになり戦争がなくなるでしょう。

「相手への思いと相手を認める心」をみんなが持てるようになり、人々が宗教、国籍、性別を超えてわかりあって過ごす事ができるようになったその時こそ、本当の「平和」が生まれると思います。いじめなどの社会問題も戦争もない社会がきっと生まれるでしょう。そして、その時には誰でも自分が一番きれいだった時をきれいに語る事ができるでしょう。そのために、自分との「違い」を受け取って理解する事、そして、その心を次の世代に伝え続ける事が私たちがすべきだとわたしは思います。

元Ｉメイトのひと言

シワポーンさんは茨木のり子の詩から、一見平和のように見える日本社会に潜む深い問題を見事に言い当てています。彼女に、実態をみつめ、誰もが「相手への思いと相手を認める心」を持つことの大切さを教えられました。

（古海　正子）

自分のストーリーを作る

パラウィ・マスック
アジ風歴 12 年　タマサート大学出身
バンコク在住　　日系企業勤務

この度、Ｉメイト学生の発表を聞く機会を頂き、大変嬉しく、感動しました。話を聞いて、OL の私の世界を見る目が少し変わりました。「自分の未来を作りたい」、「戦争はもういやだ」、「私が一番キレイだった時」、これらの言葉が私の心に残っています。

「平和」とは何かを考える機会をいただきました。戦争で勝てば、平和になると思う人がいるかもしれません。自分の大切な人を守るために、どうしても敵を殺さないといけないと思う人がいるかもしれません。だが、人を殺すということは、だれかの大切な人を失わせることになってしまうのです。「やられたらやり返す」ことは、悪循環が繰り返されるだけ、全くいいことがないと、私は思います。

平和は心で作れるものだと信じています。Ｉメイト学生のスピーチを聞いて、毎日忙しい日々を送っている自分の将来についても考えさせられました。国籍は何であれ、私たちは会社の目標を達成させるために毎日の仕事を頑張っているただ一人の人間です。

「わたしが一番きれいだったとき」を聞いて、１０年後、２０年後の自分はどうなるだろうと思うのではなく、「自分はどうなりたいか」と思うようになりました。自分のためだけでなく、もっと人のために幅広い活動をしたいと思うようになりました。これまで周りの人が自分の能力を認めてくれたのも、Ｉメイトの高橋さんのお陰だと思っております。日本の適切な言葉遣いを教えていただき、文部科学省の受験の時にも大変お世話になったので、これから自分は日本語を通じてタイと日本の架け橋になれれば、と思うようになりました。

私は今、日系企業の仕事のほか、タイにある日本大使館、JICA、JETRO、タイ側の政府機関などの仕事もしております。両国の相互理解を担う仕事です。今回の発表会の話を聞いて、忘れていたことを気づかせてくれました。ただ忙しい日々を送るのではなく、自分らしく生きる毎日を送っていくことも大切だと気付きました。日本語、日本文化の理解者である自分は、世界のために何ができるかを考えさせられました。これからは、一番きれいだった時の自分のストーリーを作っていきたいと思います。

元Ｉメイトのひと言

パラウィーさんと交流して１３年、素敵な女性に成長した写真と「平和への深い思い」に感動しました。京都で見た紅葉、我が家での食事会と懐かしい思い出が蘇り、現在、タイの日系企業で多岐に活躍されている様子に「アジ風の絆」はしっかり根付いていることを嬉しく思います。

（高橋　雪子）

３人の発表に鳥肌がたった

ド・アイン・トゥー

アジ風歴７年　貿易大学出身
京都在住　日系企業勤務 賛助会員
アジ風第４回奨学生

今年２月の新春交流会で行われたスピーチコンテストにオンラインで参加しました。７月に東京で開催されたアジアの新しい風創立 20 周年記念イベントで、３人の学生が朗読した詩と、その感想をオンラインで聞きました。東京の会場に行くことができなくて残念でした。また後日、録画された動画でそれぞれの発表を拝聴しました。半年後に３人の発表を再び聞いてびっくりしました。なぜかというと、日本語能力だけではなく３人の表現の素晴らしさを感じたからです。目を閉じて発表内容を聞いてみたら鳥肌が立ったことがあります。本当に感動しました。みんなすごい成長だなと思いました。星ようにキラキラ輝く姿が見えました。

今年のゴールデンウィークの連休に広島へ行きました。爆弾ドーム、平和記念公園、資料館など広島の有名な歴史場所を初めて訪れました。７月のイベントで再度「平和への誓い」を聞いた時、広島平和資料館で見た 1945 年８月６日の物語、現物についての記憶が蘇ってきました。資料館で展示された「死体で埋め尽くされた川」の画像を見ました。資料館を出た時、気持ちが重かったが、とても良い勉強になりました。

私のベトナム国もひどい戦争を経験しました。平和を獲得するためたくさんの命が犠牲になりました。戦争被害を受けた国の人たちはどれだけ苦しかったか、歴史授業、博物館の訪問、家族のお爺さん、お婆さんの話から分かりました。平和を大事にして「自分も周りの人も大切にし、互いに助け合うこと」は毎日忘れてはいけないことです。

元Ｉメイトのひと言

元Ｉメイトのトゥーさんとは、２月のスピーチコンテストに共に参加し、感想や審査内容について意見交換をしたことを思い出します。

「平和」をテーマにした今回の企画は戦争の爪痕を強く残しているベトナム生まれのトゥーさんにとって平和について考える良い機会だったと思います。

（曾我部　健）

私は最北の地、猿払村の国際交流員

ライ・ティ・ジュエン
アジ風歴６年　貿易大学出身
北海道在住　国際交流基金国際交流員

発表者３名の皆さんの朗読を聞き、様々な刺激を頂きました。まず、聞いてびっくりしたのは、皆さんの高い日本語力です。発音とイントネーションがとても自然で聞こえやすく、表現力も豊富で、日本人の方が喋っているようでした。

また、３人とも大学生とは思えないほど落ち着きがあり、しっかりしていると感じました。自分はそれほど日本語が上手に話せていませんし、性格はどちらかというと、おっちょこちょいでせっかちなほうなので、皆さんのその落ち着きぶりにとても感心しました。先輩としてさらに努力をと改めて思った次第です。

そして、朗読会の課題である「平和」、「自分が一番きれいだった頃」などについて考えるきっかけも得ました。私は今、日本最北の村・猿払村というところで国際交流員の仕事をしておりますが、猿払からはロシアのサハリン島がぼんやりと見えます。ロシアとウクライナの戦争の報道を見た時、毎日見えてるあの国で戦争が起こっていると、危機感を覚えました。戦争というものを体験したことのない私は、当然ですが、戦争で苦しむ人達の想いを 100 パーセント理解できません。きっと悲しく、痛く、切なく、つらいものでしょう。

朗読会後、平和のために私にできることを、自分なりに考えました。私はスーパーヒーローのようなすごいことはできません。ですが、掛け橋の仕事として行っている日越交流イベントなどを通じて、両国の文化を日本人とベトナム人に紹介することができます。日本人の優しさ、礼儀正しさ、そしてベトナム人の向上心、楽観的な精神なども伝えることができます。

それらを一生懸命すれば、微力ながらも世界の平和に少し貢献できるかと思っています。

元Ｉメイトのひと言

ジュエンさんと初めてハノイで会って以来、数度の交流会と我が家へのホームステイもあったので、今では娘や孫の様に感じています。謙遜していますが、彼女はとても優秀で、日本語も上手です。

文科省の試験にパス、国際交流員として最北の地で３年目を迎えていますが、その間の活躍は地元新聞等で何回も報道されています。

今後とも地に足を付けた彼女なりの平和への貢献、魅力ある自分磨きを見守っていきたいと思っています。

（中村　一郎）

若者に伝えたい最大のメッセージ

ド・ティ・トアン
アジ風歴４年　貿易大学出身
10 月から日本で日系企業に就職

今回の「平和を希求する朗読と感想コンテスト」で入賞した人たちは、日本語だけでなく、文学的な鑑賞力も優れていると思います。なかでも、タマサート大学のカーンシリー・ピティパットさんのスピーチが一番印象的でした。

顔を見ずに詩の朗読だけを聞いていたら、詩を読んでいるのは日本人だと思ったでしょう。最初に読まれた詩から、とても美しい日本語を感じました。作者の気持ちを理解しているからこそ、作者が自分の詩を読むように感動的に読んだと感じました。区切りごとに低音が上がったり下がったりしましたが、一番印象的なのは、作者の苛立ちを表現した詩を読んだときです。

わたしが一番きれいだったとき　　わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり　　卑屈な町をのし歩いた

あるいは、さまざまなレベルの感情を表す形容詞でもそうです。

わたしが一番きれいだったとき　　わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん　　わたしはめっぽうさびしかった

カーンシリーさんと同じように、私もこの詩を読んだとき、まず「わたしが一番きれいだったとき」というタイトルに惹かれました。このタイトルからは苦難や不幸、孤独は感じられません。そのため、おそらく多くの人は、作者が重要な節目を迎えた美しい青春時代を語るのだろうと推測するでしょう。しかし、この詩を読み上げると、戦争という残酷な現実が、作者が青春時代に経験したはずの機会を奪ってしまったときの、沈殿した感情であることがわかりました。

カーンシリーさんはこの詩について感じているだけでなく、その周辺についても実際に観察しています。彼女が言ったように、この詩が書かれてから 60 年以上が経ち、世界は大きく変わりましたが、戦争はまだどこかに存在しています。そして多くの人にとって、「わたしが一番きれいだったとき」は、廃墟と化した村や倒れていく人々の姿など戦争の重い影響を受けた時代です。

人によって、「わたしが一番きれいだったとき」は違いますが、今の私たちのように平和に暮らす若者にとって、「やりたいことはなんでもできた、夢のために頑張った」瞬間もまた、美しい青春の一部だと思っています。それはまた、カーンシリーさんが若者に伝えたい最大のメッセージでもあるのでしょう。そのメッセージが伝われば、私たちの世界も少しずつ良くなっていくと考えます。

元Ｉメイトのひと言

Ｉメイトのトアンさんの夢に向かう努力、苦しみを一緒に思い、考え、喜ぶ機会を得たことは、高齢者の私にとり素晴らしい機会でした。トアンさんは、今が「一番きれいだった」時。私にとっては「一番充実した時」。

（今井　進）

日本語教師として平和の大切さを伝える

アウリア　リフキアナ　アジクリ
アジ風歴３年　パジャジャラン大学出身
ジャカルタ在住　日本語教師

2021 年のパジャジャラン大学の学生コーディネーター、アウリアと申します。卒業後も古海さんとは時々リモートで対話を続けています。

Ｉメイトの学生になったときは、コロナのせいで、直接にお会いできるイベントがなかったので、正直に言って悲しいと思っていました。それでも、アジ風創立２０周年記念のイベントがあって、ズームからまた久しぶりに皆さんと会えて嬉しかったです。

頑張って朗読をしてくれた学生達に感謝しています。発表した３人の学生さんは皆、とても素晴らしかったです。朗読を聞いて私の心に残るいくつかの印象を伝えたいと思います。

アリサさんの「平和への誓い」についての朗読を聞いて、悲しくなってしまいました。人は自分の我儘のせいで､他の人の家族や人生や思いを奪ってしまいます。アリささんが感想を「本当の強さを持てば､戦争は起こらないはずです｣と心を込めて述べています。この朗読を聞いて、本当の強さは人の気持ちを分かって、理解する事ということを学びました。

アリサさんの朗読を聞いて、戦争はもう過去の事ですが「今は背中を向けないで、うしろを見ないで、後悔しないで、一緒に新しい未来を創ろう」と強く思いました。今私は日本語の教師として働いていて、生徒たちに広島の話をしたりしながら、平和のことも伝えています。平和の大切さを伝えていくことが、お互いの大切なこと、大切なものを守ろうとする気持ちであると言いたいです。生徒の心にどんな人にも平等に優しく接し、決して争ったりしてはいけないという気持ちの大切さを伝えることができると信じています。

元Ｉメイトのひと言

交流を開始した時アウリアさんは学生コーディネーターだったため、Ｉメイト交流のほか、交流会の相談やおしゃべりの場の打合せで Zoom で時々会う事ができ、まだ１度も会った事はないのにとても良く知っているような気分でいました。

昨年秋の卒業以来連絡を取る頻度が少なくなっていましたが、最近とても日本語が上手になって驚いていたところ、日本人男性と婚約したと嬉しい報告がありました。花嫁姿が楽しみです。

（古海　正子）

未来へのメッセージをも発信した３人

高　楊
アジ風歴 20 年　清華大学大学院出身
架け橋グループの前身第１期生
北京在住　日系企業勤務

創立記念イベント「平和を希求する日本の民の心」でのプレゼンテーションについて、感想文を書くことになりました。

まずはアリサさんの発表ですが、声のトーンを上げたり下げたり、合わせて表情も変化があり、豊かな発表を見せてくれました。平和な日常が戦争に奪われる、戦争は昔のことではない、そして、本当の強さとは何かについて深く考えていたことがよく分かりました。

２番目に発表した金さんですが、与謝野晶子さんによる反戦の詩を朗読し発表してくれました。原作は難読の漢字が多く、読み解くために大変工夫されたと思われます。ぜひ、これからも、勇敢に自分の気持ちを語ってください。

最後に発表したトーイさんが茨木のり子さんの詩を選んでいます。一番きれいだった時と対照的に、残酷なことがたくさん起きています。この対比を分かりやすく朗読し、ひどい戦争に負けず、楽観的な態度を保つことがとても大切だと自分の意見を述べていました。

３人ともそれぞれの思いを堂々と発表ができ、そして未来へのメッセージをも発信しています。発表を聞きながら、自分も学生時代に戻った気がします。2002 年の秋に、上高子さんが清華大学で講演をされていたことを記憶しています。その後、Ｉメイトとの交流が始まり、日本人の先生も派遣してくださいました。

Ｉメイトとの交流はメールという手段、そして在学期間という時間制限を超えています。2004 年、初めて日本に行ったとき、Ｉメイトの児玉久美子さんと杉本典子さんと一緒にお食事をして、歌舞伎を見ました。2005 年からしばらく日本での生活が続いていました。朗読に関心があり、上さんからアナウンサーの園木夫人を紹介していただき、毎週末に横浜で朗読を教えていただきました。

アジ風の多くの会員と個人的な交流がありました。20 年は長いようであっという間です。人と人との交流を地道に展開するアジアの新しい風が、さらなる発展をしていくよう祈念しています。

元Ｉメイトのひと言

アジ風創立の翌年 2004 年に入会し、初めてのＩメイト交流の相手が高楊さんでした。勉強熱心で日本語の疑問を鋭く質問されて、答えられないもどかしさを感じていました。一念発起して日本語教師の資格を取りました。

高さんは精華大学を卒業後、東京工業大の大学院に留学し、その後も交流が続き、2014 年９月の北京での結婚式に杉本夫妻共ども出席しました。高さんの民族衣装の美しいウエディング姿が今でも印象に残っています。

（児玉　久美子）

「One world, One dream」

ジャン・ミャオ
アジ風歴８年　清華大学大学院出身
架け橋Ｇ→東京大学大学院博士修了
外国人特別研究員→北京理工大学教授
北京在住

「アジアの新しい風」は、アジアの平和ひいては世界の平和に貢献することを目的にしています。今年はアジ風創立２０周年で、「平和を希求する日本の民の心」をテーマにして、プレゼンテーション大会を実施しました。この中で、架け橋グループの後輩である金佑真さんの発表を聞いて、いくつかの感想を持ちました。

金さんが選んだ作品は与謝野晶子の詩「君死にたもうことなかれ」でした。ここで、与謝野晶子が気にしているのは、弟が戦場から生きて帰ってこられるかどうかであって、戦の勝敗そのものではありません。一般の人々にとって、戦争は苦労するだけの事かもしれません。最も親しい人が戦場に行くと、家族の心中に残るのは心配しかありません。戦争では死傷者は避けられません。何万人もが戦死するのはよくあることです。北野武が「人の命は、２万分の１でも８万分の１でもない。そうじゃなくて、そこには１人が死んだ事件が２万件あったってことなんだよ」と言っていました。戦争も一緒だと思います。戦争で亡くなった人たちは私たちと同じように、兄弟や姉妹、息子や娘、夫や妻、父親や母親という普通の人たちなのです。ひとりが死んだ事件はひとりの痛みだけじゃないのです。こんな辛いことを戦争では何千何万回も起こし、苦しんでいる家庭も何千何万軒もあります。それは悲しい事です。

私は戦争についての話には、特に興味を持ったことはありません。平和な時代を生きることが、とても幸せなことかとしか思いません。それぞれの国にはそれぞれの利益があることは否定できません。国と国との間には、利害関係があります。でも私たちは皆同じ地球に住んで共通の家に住んでいます。世界中には異なる文化的背景があり、異なる問題の捉え方があります。でもそれこそが、この世界の多様性の意味なのです。お互いによく理解し、助け合って、発展していけば良いのではないでしょうか。

現在、地球規模で自然災害が頻発していますが、その一方で、世界のいくつかの地域では戦争が起きています。一日も早く戦争がなくなり、みんなが幸せになりますように。「One world, One dream」が妄想ではなくなりますように。

元Ｉメイトのひと言

ジャン・ミャオさんは、東工大架け橋の２回生で、東大博士課程卒業後に研究員を経て、2022 年より北京理工大学の教授として活躍されています。アウトドアー活動が大好きで日本社会にも積極的に溶け込んだ素晴らしい女性です。

（冨平　茂）

Ｉメイト学生

晶子の詩が今伝えていること

馬　紫晗
清華大学

『君死にたもうことなかれ』は、与謝野晶子が日露戦争最中に発表した詩で、従軍中の弟の身を思って詠んだものです。百年以上の時間と国境と言葉の壁を乗り越えて、その平和を願う切なる思いに、私は大いに感動しました。

「大切な人に死んでほしくない」という思いは、人間の普遍的な心情で、誰もが持ち続けている気持ちでしょう。ウクライナの戦場の映像などを見る度に、私はこの晶子の詩を思い出します。戦争が起きてしまうと、どこの国でも犠牲者は英雄的な存在になります。「戦争が起きた時に、自分の命と国の利益はどちらが大切だろう」という問題提起は、非常に勇気がいるものです。この詩の中で、晶子は明確に「家族が大事で、大切な人に死んでほしくない」と言い切りました。その勇気と人間愛は並み大抵なものではありません。

私たち普通の人間は、恐らく誰でも子供の時から、「人の命は世の中で一番大切なものだ」と教えられてきました。しかしその一方で、戦争に加わり死んでも構わないと思う人が結構いるのも現実です。この矛盾した意思と心情はどうして矛盾しながら成り立つのでしょうか。言うまでもなく、政治家などの扇動が大きいでしょう。この煽動の力で、多くの人々が国のために死んでもいいと思ったり、周りの人が戦争で死んでも、悲しく思わなくなったりします。どこどこの国の人である以前に、まず自分でいてほしい。晶子のこの詩は私たちに、私たちは人間愛さえあれば、素朴な兄弟姉妹に対する愛さえ持っていれば、またこの愛のために訴える勇気と意思さえあれば、世界の平和は維持できると言っています。私は晶子の詩が今私たちに伝えていることを大切にしたいと思います。

Ｉメイトのひと言

馬さんと交流を始めたのは昨年の 10 月、やがて 1 年になる。毎週日曜日には必ずメールを送ってくれる。最初にそうします、と決めたのは馬さんで、試験勉強で時間がない中でも、一度決めた約束を守る彼女の律義さは立派だ。しかし、それが馬さんの負担になってはダメ。これからは少し余裕をもって交流していこう。中国の猛烈な競争社会の現実は過剰なストレスを若者に与えているという。馬さんにも報道されている深刻な就職難の壁がこれから立ちはだかるだろう。中国経済の厳しい見通しが論じられる昨今、馬さんには様々なストレスに負けずに、今の学生生活を実り多いものにしてほしいと願っている。

猛勉強の日々、「奥さんが吹き込んでくれた『君死にたもうことなかれ』を何度も練習しました」というスピーチコンテストの発表は実に堂々として見事だった。晶子の詩に、「平和を求め、守っていくことの大切さ」を見出す馬さんの繊細な感受性を素晴らしいと思う。

（荒木　春洋）

あなたはどんな平和を求めますか

シャノンヤー・キーラー
タマサート大学

何でも加速に変換する今の時代は、昔に起った「過去」を忘れた人もいるでしょう。「人は過去から学ぶ」という言葉があります。人々は過去を忘れてしまうと同じ間違いを繰り返してしまいます。「平和を希求する日本の民の心」コンテストの３人の発表を聞くと、解釈した内容と皆さんの感想がよく伝えられて、とても感動しました。私たちは戦争がない時代に生まれました。しかし、過去の人々の悲しみを学んで、覚えて、忘れないように、そして同じ間違いをしないように、次の時代の人々にも伝えたいです。

カーンシリーさんが朗読した「わたしが一番きれいだったとき」は美しい言葉の中で戦争の残酷さが映っています。茨木のり子さんの今まで生きていた人生は悲しさ、悔しさ、そして残酷な思い出が一番残っていて、私が想像できない悲しみを感じました。以前、長谷川 義史の『ぼくがラーメンたべてるとき』という絵本を読みました。単純な物語で、少年がラーメンを食べてるとき、お隣さん、隣の町の人、だんだん遠くの人たちが何をしているかを語る絵本です。しかし、最後の話ではとても遠くの国に人が倒れている、とても悲しい話です。私たちが平和な国で住んでいる間にどこかで誰かが戦争の影の下で生きているのです。

戦争はただ人を悲しませるのは間違いない。では、戦争は誰にも幸せを与えているでしょうか。戦争がない国と言っても、平和と言えない。人々は日常でも暗闘している。兄弟の間に、学校の間に、社会の間に、この世界の中で生きられるために誰でも戦っている。その上で、人々は自分の平和を探している。私の平和はただマイペースで生きられるならもう充分ですが、皆さんはどんな平和を求めたいですか。

Ｉメイトのひと言

Ｉメイト交流最初の挨拶メールから達者な日本語を駆使したシャノンヤー（愛称ジョイ）さんは、意志が強く、常に向上心にあふれています。毎回「もっともっと頑張ります」と締めくくったメールが届きます。平和希求の課題に、「じぶんが一番きれいだったとき」への感想と同時に、自分の心に残った絵本を紹介することも、ジョイちゃんならではの頑固な一面です。

貿易大学、パジャジャラン大学、タマサート大学の私のＩメイト３人とＺ oom で交流する折には、巧みな日本語会話で国の異なる４人の場をリードする、頼もしいＩメイトです。書くことに優って話すことの得意な彼女は、この秋から大阪大学に留学してきます。見聞を広めて、心のゆとりも持ち合わせた学生生活を送り、更なる日本語遣いになって欲しいと期待しています。

（原谷　洋美）

待っている人の祈り

シャリサー・メーターピスィット
タマサート大学

明治の時代は、日々は素朴でした。でも、いくつかの家族にとって、その 日々は、心配と恐怖でいっぱいの日々でした。自分の国を守るのは自分の家族を守ることでしょう。そんなことは確かに大切で大変名誉なことですが、家にいる人は 毎日、永遠のように長い間、古いドアで待ち、希望的観測をし、あてもなく「ただいま」を待って、やっと「おかえり」と言う日を待っています。その人たちにとって、部屋が広くなって、床が寒くなって、家が暖かくなくなるでしょう。その家という場所を暖かくさせてくれた人がいなかったら、どうすれば家が自分の家のように感じられるでしょうか？

その人たちは、運命が決めたか誰かが決めたか分からないと思いながら、家族と離され ました。毎晩、寝る前に神様や誰かに正気を求めながら平和と大切な人の無事帰還を祈ります。もし、想いが聞こえるなら、泣きながら「お願い」「もう戻って来て」「一 緒にいて、行かないで」「勝って」「生きて」という音が響くでしょう。 そしてまた、怖くて言えないもう一つの言葉、「死なないで」。明治の時代、日々は素朴だったのに、人々は未知と向き合い続けます。そういう突然なことが起こるのは、戦場で何が起こるか誰が準備できたでしょうか？誰も知るわけがありません。

この詩は、待っている人の祈りだと思います。私は、読んでいると悲しくて心が重くなって仕方がありませんでした。改めて平和の大切さを痛感しました。この詩はとても深い感情を込めて書かれました。 書かれた行ごとに、文字が跪いて懇願しているかのようで、心の中のどこかで雨が降っているがごとく、人生の失われた時間の大切さを強く感じてしまいました。 私は、言葉がどのように感情に影響を与えるかということにいつも興味を持っていました。言葉でこれほど 多くの物語や感情を伝えることができるのは美しくて素晴らしいことだと思います。

Ｉメイトのひと言

寄せられた感想は、彼女の感性の素晴らしさが十二分に表現された、とっても素晴らしい感想と感嘆しています。

昨年 10 月にＩメイトとなり、その後定期的に交流していますが、いつも明るく、何事にも前向きに取り組む素晴らしい若人です。今、歌手になりたいと大きな夢を持っていますが、今年の夏日本に短期留学し、そこで色々刺激を受けたようで、目標は、変わっていくようでそれも成長の証だと思います。日本語学科でないため、日本語の習得には人一倍の努力が必要ですが、自覚しており、必ずや目標の資格を取ってくれると思います。Ｉメイトの活動を通じ、本当に希望溢れる素晴らしい人生を切り開いてくれるであろうと期待し、一助になるよう明るく楽しく交流していければと思います。ハープちゃん（シャリサーさんの愛称）一緒に頑張ろう！

（含本　一雄）

自分のやりたいことを一歩一歩

ダオ・ティ・ミン・グエット
貿易大学

私が生まれた時には、ベトナムでの戦争は既に終わっていました。したがって『平和』の本当の状況はよくわかりませんでした。私が想像している平和は、今の社会と変わらない状況かなと思います。戦争もないし、人々も普通の生活が送れる状態のことです。茨木のり子さんの詩を読んで、平和の意味がなんとなくわかってきました。

この詩のタイトルを初めて読んだ時、とてもユニークなタイトルだと思い、もしかして作者の青春時代の思い出を綴った詩なのではないのだろうか？ 誰が読んでもこの詩のタイトルは気になるタイトルだと思います。この詩は、戦争によって青春を失った哀しさと虚しさと悔しさと、それでも、生きていこうとする気丈夫さが、素直に表現されています。戦争で国が荒廃し、周りの多くの人が亡くなり、作者の青春の夢も消えたように思えました。しかし、逆境を乗り越えて、彼女は生き続けて、前向きに生きることにしました。「わたしが一番きれいだったとき」という詩句が繰り返されていることから、思いの強さが、文章を追うごとに伝わってきます。

私もかつては、自分がどんな分野に向いているのか、どんな仕事に向いているのかがわからず、無力で何度も泣いていました。しかし、家族や友人がそばにいて応援してくれていることに気づき、その困難な時期を乗り越えられました。これからももっと時間を有効に使って、自分のやりたいことを一歩一歩進めていき、頑張っていくことで、良い結果が生み出されることと信じています。

現在のウクライナとロシアの戦争は、非常に深刻で悲しいものです。この紛争は多くの人々に影響を及ぼし、美しい土地や罪のない人々が犠牲になっています。この戦争が早く終結し、人々が平和で安全な環境で生活できるようになることを心から願っています。

私の国では、祖先たちが、国全体に平和をもたらすために、血と汗と涙を交換しました。だからこそ、私たちはもっと努力して、多くの知識を学び、平和な国の発展のために貢献しなければならないと思います。

平和は、私たちが夢を持ち、人生と未来に良い価値をもたらすために絶え間ない努力をすることで得られることと思います。それはあらゆる人にとっても一番重要なことだと思います。

Ｉメイトのひと言

この夏に長崎市の「精霊流し」を見に行きました。その際に被爆地の平和公園、原爆資料館や震源地公園も視察してきました。グエットさんが住んでいるベトナムも過去に大きな戦争の歴史があり、親や親戚から悲しい話を色々聞いていることと思います。又、今起こっているロシアとウクライナの戦争のこともショッキングだと思います。だからこそグエットさんの「平和」への思いは特に強いようです。

今の若者が戦争を嫌い、平和な国際社会を築いてくれることを大いに期待します。

（林　孝男）

本当の強さは破壊するためではなく、守るために

グエン・トゥー・アイン
貿易大学

「平和への誓い」を読み終わった後、詩の言葉が心の奥底で響き続けています。アリサさんの朗読で、私は詩の世界に入り込んだようです。そして、詩に込められた感情は少しずつ私の心に染み込みました。

詩は幸せな日常ではじまります。人によって、幸せの定義は違うかもしれません。しかし、誰でも大切な人と過ごせるのは最も幸せなことの一つではないでしょうか。一緒にご飯を食べながら日常生活について喋ったり、天気のいい日に公園を散歩したりして、こういう小さなことは大きな幸せをもたらすことができます。幸せは穏やかな水流のように、人の心を慰めます。

けれど、詩の中の幸せは長く続きません。「昭和20年 8月6日 午前8時15分」、突然穏やかな水流は激しくなり、赤く染まりました。そして、あっという間に凶暴な波になり、人々を沈めました。全ての幸せは一瞬にして苦しみに変わりました。７７年経っても、その一瞬が人々の頭から離れません。時間は戦争の傷跡を癒すことができません。特に、心に残る傷跡は。
悲しみが忘れられないことと、悲しみが乗り越えられないことは同義ではありません。被爆者は悲しみから立ち上がっただけでなく、平和な広島を創りました。アリサさんが述べたとおり、「平和への誓い」は過去を忘れず、今こそ未来のためにできることをやるべきだと伝えています。

「本当の強さとは思いやりの心をもち、相手を理解しようとすることです。本当の強さをもてば、戦争が起こらないはずです」。これは「平和への誓い」の一番心にしみる文だと思います。本当の強さは破壊するためではなく、守るために使われるものです。

日本人の山崎さん、イタリア出身のアレックスさん、インドネシア人のアリサさん、ベトナム人の私、そして世界の他の国の人々、私達には二つの共通点があります。生まれた時から本当の強さを持っていること、心の奥底から平和を願うことだと、私は信じています。

Ｉメイトのひと言

各国の10代、20代の人たちが、広島の原爆の悲劇に心を寄せて、真正面から語っている姿に深い感動を覚えます。戦争は過去の出来事ではなく、原因は様々ながら、現在も世界のあちこちで大小の戦火が上がっています。「人間はひとりひとりちがう存在」。自分とは異なる価値観をもつ「他者」に反感や敵対心を持つのではなく、お互いに興味を持って、ちがいや個性、多様性を面白がって生きていけたら、私たちの身の回りに日々起こる小さな諍いから減らしていけるのでは。いつもそのことを頭の片隅に置いて暮らしていきたいと思います。

（百済　久仁子）

歴史から学んで平和を守りたい

シリュ　プラメスワラ
パジャジャラン大学

私は与謝野晶子の「君死にたもうなかれ」、茨木のりこ「わたしが一番きれいだったとき」、バルバラ・アレックスと山崎鈴の「平和への誓い」を読みました。それぞれのスタイルで素晴らしい作品でした。

与謝野晶子の「君死にたもうなかれ」は素敵な作品でした。その作品を読んだあと、私は戦争で大事な人が簡単に奪われることをもう一度考えさせられました。それで、私たちは今の平和な日常生活をもっと大事にすることだと思います。そして、その作品を読んだとき、私には難しい言葉が多かったのですが、それこそが与謝野晶子の「君死にたもうなかれ」の魅力的なポイントだと思います。

茨木のり子「わたしが一番きれいだったとき」も茨木のり子独自のスタイルで美しい作品だとおもいます。私にはその作品が一番印象に残っています。とくに、「わたしが一番きれいだったとき」を読むたび、胸に響いています。そして、いつか大人になったとき、私が一番きれいだったときに何を後悔しているか、何を果たしたかを考えさせられます。また、詩的な文体もその作品を美しくしています。

一方で、バルバラ・アレックスと山崎鈴の「平和への誓い」は子供の視点から戦争にたいしてどのようなことかを最も強く表しています。先の作品とは違って、「平和への誓い」の文体はまっすぐで、物語のような子供の純粋さを強めに表しています。私に単純で当たり前なことをもう一度思い出させました。

人生というものはもちろん平和だけではないものです。だからこそ、私たちは歴史から学んで、今の平和を守っていきたいものです。

Ｉメイトのひと言

日本の歴史上の時期が違う戦争と平和についての３つの詩を読んで、インドネシアの現役の大学生がどんな感想を持ったか、大変興味がありました。勿論、彼はそれぞれの詩の細かな具体的背景について勉強したわけではなく、その知識もほとんど無かったかと想像します。

しかしながら、詩を通して戦争やそれに伴う原子爆弾の恐怖や人的被害について思いをはせ、大事な身近な人達を奪い、若い人たちの大事な時間を奪い、多くの人命を奪う戦争に反対することの大事さと平和の尊さを知ったのではないかと思います。

インドネシアの歴史からも植民地時代や第二次世界大戦の時の戦争から学び、平和を求め守っていくことに繋げていって欲しいと願わずにはいられません。

（鈴木　一美）

ちっぽけな命がいかに尊いものか

ブレンダ アブリッシラ　パウル
パジャジャラン大学

私はバルバラ・アレックスと山崎鈴の「平和への誓い」、そして茨木のり子の「わたしが一番きれいだったとき」という素晴らしい詩を読ませてもらいました。とても力強い詩で、私の心に響きました。読んでいて鮮明なイメージが浮かんでくるような文体がとても気に入っています。私たちに伝えたかったメッセージも、実に明確に提示されています。

私は「平和への誓い」の冒頭の「あなたにとって、大切な人は誰ですか」という一文がとても好きです。この質問で、作者が読者と対話しているように感じられます。そして、作者は読者に何を伝えようとしているのだろうかと考えました。読者を詩の世界に吸い込みます。

しかし、私の好きな要素であり、この詩を好きにさせているのは、相反する文章であります。楽しい文章と悲しく暗い文章のコントラストが実に魅力的です。すべてがきれいごとではないということを如実に示しています。しかし、醜い部分を知っているからこそ、美しさをより評価できます。

茨木のり子の「わたしが一番きれいだったとき」の文体もとても好きです。この詩では、対照的な文章もまた、詩の情景を描写するために実に光っています。この詩からは、希望と楽観主義があふれているのが感じられます。それが1958年という遠い過去に書かれたものだと知って、私はさらに驚きました。日本の歴史と茨木のり子のこの詩の背景についてもっと知りたくなります。

両方の詩を読み終えた後、驚きと同時に悲しみでいっぱいになりました。この残酷だが美しい世界で、私は優しい人間になれるのだろうかと考えました。そして、私たちのちっぽけな命がいかに尊いものであるか、美しい物語を書くために時間を使うべきであると気づいてほしいのです。そうすれば、誰も二度と苦しい時代を経験する必要がなくなるのですから。

Ｉメイトのひと言

交流では、何かひとつ、その時々の季節に纏わる日本の諺や習慣を写真とともに紹介し、また文章は出来るだけ簡潔な短文を心掛けるようにしています。一方、こちらからのメールに対しては、彼女の方から新たなテーマ（宿題）を投げ返してくれることもしばしばです。
〖斎藤 ⇒ ブレンダさん〗
東京は、このところ一気に春めいてきました。『春めく』とは、春らしくなるという意味です。
〖ブレンダさん ⇒ 斎藤〗
「春めく」ですか。なんとも面白い言葉です。東京には桜の花が咲いていますか。きっと、あたたかい風景なんでしょうね。新しい始まりです。新しい始まりといえば、最近知ったのですが、「青」には「始まり」「青春」という意味があるそうですね。今人気のアニメ「ブルーロック」で知りました。（原文のまま）
好奇心旺盛なブレンダさんとのキャッチボールは、今始まったばかりです。
（斎藤　利治）

平和を築く

アプリリア　ヌルマウリ
パジャジャラン大学

茨木のり子の作品「わたしが一番きれいだったとき」を読みました。この詩は、家族、友人、教師など、私たちの人生における大切な人々について考えさせました。彼女と同じように、広島の原爆犠牲者は、私たちの日常に影響を与えて、生きる意味と幸福を与えてくれます。しかし、この詩はまた、1945 年の広島への原爆投下など、歴史上の暗い出来事を思い起こさせました。この辛い経験を忘れず、より平和を大切にするよう促しています。広島の原爆犠牲者の気持ちを考えて、私たちに、再び立ち上がり、努力を続けることを促しています。私たちは過去を変えることはできませんが、未来を作ることができると思います。

私たちは皆、より良い未来を実現するために果たすべき役割を担っています。それは、色々なことを学び、話し合い、文化の違いを分かち合えることを通して実現することができます。どんな小さなことでも、平和を支える環境づくりに大きく貢献することができます。また、私たち自身の態度や行動を変えることから始めましょう。まず、お互いを認め合うことを学ぶ必要があります。私たちはそれぞれの個性を持った人間であり、それは祝福されるべき豊かさなのです。また、私たちを取り巻く環境にもっと注意を払う必要があります。人間だけでなく、自然や他の生き物たちにも注意を払うことが必要です。

最後に、お互いに助け合うことを約束しましょう。私たちの小さな行動が他者に大きな影響を与えることがあります。助け合うことで、危機や紛争が発生した際に早く対応できるシステムが構築されるのです。今日まで獲得してきた平和は、戦った先人たちへの感謝のしるしとして維持しなければなりません。人間の価値が尊重し、永遠の平和が共通の目標とすることが、より良い世界を実現することができます。

Ｉメイトのひと言

この感想文は、深い洞察に基づいて書かれており、感情の込もった、感銘を受ける内容です。詩のテーマについての繊細な説明は、私たちの現在と未来へどう関連するのかを示唆しています。個人の行動や態度の変化、互いの尊重、環境への配慮、互助の重要性、さらに、これら小さな行動が世界の大きな変革につながる可能性を訴えています。

あの素晴らしい朗読からインスパイアを受けたあなたの思いが、まっすぐに伝わります。暖かく力強く説得力のある大人の女性の言葉で綴られた文面は、読む人に、平和への貢献を考えるきっかけを提供してくれる力があります。ありがとう、アプリルさん。

（菊池　和美）

自分の「一番きれいだったとき」を探して

高　宇萱
清華大学大学院　架け橋グループ

『わたしが一番きれいだったとき』は、第２次世界大戦で青春時代を送った詩人茨木のり子の代表作です。戦争経験が全くなかった外国人読者の私は感動し、何よりも、若い女性の視点から戦争体験が読まれていることが新鮮でした。

まず、平和への切なる願いが伝わってきます。茨木さんは女性にとって一番いいと言われる時期に、戦争によって何もできなくなりました。彼女の目に映ったのは、青空や太陽ではなく、荒廃した街や無惨な死体でした。耳に届いたのも、苦しみ悲鳴を上げる人々の声だけでした。もし自分が彼女と同じ時代に生まれていたら、どうやって生きていったらよかったのかと考えずにはいられません。今私たちは自由に暮らせる幸せを再認識し、感謝の気持ちを忘れないようにしなければないと思います。

また、人生に対する諦めない勇気も感じられます。一生の中で、「一番きれいだったとき」は若い時だけではないと思います。年齢が上がっても、外見の美しさが衰えても、人生の経験から培われた内面の美しさはますます輝くからです。それもまた人生における「一番きれいだったとき」の一つではないでしょうか。何歳になっても、何が起こっても、生き続けて、自分の「一番きれいだったとき」を探して、大切にして、失くしても、諦めずに、再び取り戻そうとすることが、この詩から学んだ大事なことです。

『わたしが一番きれいだったとき』は、茨木のり子が亡くなってから 17 年経った今でも、再版や翻訳が相次ぎ、生命力に溢れた種のごとく、時代や国境を超えて、世界中に平和と勇気の花を咲かせ続けています。今の一番きれいな時代に、皆さんがいつまでも一番きれいな自分でいられることを願っています。

Ｉメイトのひと言

終戦を迎え、それまでの生活は言うに及ばず、全ての価値観や心持までもリセットを余儀なくされた日本人。それは戦後生まれの私には想像を絶するものであったに違いない。

戦争の話になると口の重かった両親も多くの日本人同様に、あのおぞましい記憶を忘却したかに振る舞うことこそが、戦後の安寧な家庭生活の営みには何より不可欠だったのではないかとさえ思えてくるのである。

母の数少ない証言の１つ。

母の通った女学校の若い女教師は、戦時下にあっても堂々と生徒に宣言したらしい。「この戦争で日本は必ず負けます」と。少なくともこのクラスの女生徒は、敗戦への心積りは出来ていたのでは。茨木のり子と同年代の母のみならず、多くの女性の代弁者としての「わたしが一番きれいだったとき」。何と悲しくも、力強くそして逞しいことか。未だに世界各地で止むことのない人間が色めく愚かな戦。これ以上「わたしが一番きれいだったとき」はもうごめんです。

（藤原　ひさ子）

個人としての思いを表現する

小林　透子
アジ風歴３年　東京在住
東京大学教養学部４年生

与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」に対する金さんのスピーチを聞き、これまで私が同詩に対して抱いていた感想とは違う視点に気づかされた。特に、彼女のいう「周りがどんな環境であろうと勇敢に意見をいうことの尊さ」「与謝野晶子は政治観としての戦争観よりも、個人としての思いを率直に表した」という視点が深く印象に残った。

私は彼女のこれらの発言を聞き、現代の政治と個人の関係に思い至った。近年若年層を中心に投票率の低下が世間を賑わしているように、若者の政治への関心・興味は低いと言わざるを得ない。その理由をネット上で調べてみると、大きく二つの要因にまとめられるように思う。一つ目は政治アレルギー、そして二つ目は政治の存在の遠さだ。

政治アレルギーとは、その名の通り政治について友人等周囲の人と話すことを忌避しようとする心理状態のことである。日本は言わずもがな民主主義国家で、自分の政治的意見を口にしたからと言って国家に罰せられることはない。それでも、政治的意見を口にすれば周りから浮いてしまうのではないか、といった危惧が若者の間で蔓延している。政治的な主張をすることは、ある意味「勇敢さ」が必要とされることなのだ。この点で、国策として戦争が遂行されていた当時、与謝野が勇敢に反戦を訴えたことと、文脈は違えど状況は類似していると言えるだろう。

次に、二つ目の政治の存在の遠さについては、多くの現代の若者にとって、政治とは政治家たちが行うものであって、自分たちとは関係がないものに思えるのだという。私はこれらの感覚の根底には、政治とは日本全体を俯瞰するような大きな視点が必要で、一個人たる自分には到底難しすぎるという心情があるのではないかと思う。だからこそ個人の願望を政治と結びつけて主張することに抵抗を持っているとも言えるのではないだろうか。しかし、本来個人の身近な生活をより良くし、平和な社会を実現するのが政治の役割であり、そのために選挙という手段を通して主張することが可能になっているのである。与謝野の「個人としての思いを表現する」という姿勢は、現代の若者の政治に対する姿勢に大きな示唆を与えるものではないだろうか。

以上のように、金さんのスピーチから与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」は現代社会にも大きな示唆を与えるものであることを再実感した。

＊編集部註

鷗友学園女子中学高等学校の出身で、高校生の時アジアの新しい風の活動に参加して、共感し入会を希望しました。

当時、高校生の入会は初めてでしたが、保護者と一緒に入会するという条件で、お母さんの小林玲子さんと一緒に入会しました。透子さんは、コロナのために延び延びになっていた中国北京大学への留学をようやく実現し、今年の夏に帰国したばかりです。

視野を広めてこられたこととおもいます。今後の活躍を期待したいものです。

戦禍を経験した人々から私たち、そして次世代へ

志村　真帆子
アジ風歴２年　東京在住
國學院大學　法学部４年生

今年２月に行われた新春交流会から既に半年が経った。8月６日は広島、9日は長崎への原爆投下の日であり、15日は終戦の日であるが、毎年この時期になると、日本では平和や戦争について考える特集や記事を多く目にするようになる。戦後78年を迎えた今年も変わらず、当時の惨状がテレビやSNSを通して発信され、反戦への強いメッセージが私たちに届けられている。

私は大学卒業を間近に控えた身であるが、自身を振り返ってみると義務教育を終えて数年、この夏の時期を除いては平和に関する学びからしばらく遠ざかってしまっていた。それ故、アジ風に参加する各大学の学生が、平時から平和について学び、理解を深めていること、また「平和を希求する日本の民の心」という難しいテーマにも怯まず、日本を代表する作品の数々を鑑賞し自分の意見を構築する姿には、学びに対する意識の高さを感じずにはいられず、同世代としても見習わなければならないと深く感じた。

とにかく印象的だったのが、どの受賞者も共通して朗読が上手く、感情表現が豊かなことである。作者の意図を汲み取り、自分の言葉として消化していることが、朗読する際、細部にまで工夫を凝らしていることから感じられた。作品に対する感想においても、自分の思いを率直に表現したり、自分あるいは近しい人の置かれた環境を絡めた見解を述べたり、発表者ならではの言葉で表現されていたように感じる。

今回の作品としては、未来ある若者、それも愛しい弟が戦争によって命を落とさざるを得なかった悲痛を表現した与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」、19歳という年齢で戦争を経験したことで、自身に訪れるはずであった輝かしい青春時代が失われたことへの恨み、暗い影を落とした戦争に対する怒りを綴った茨木のり子「わたしが一番きれいだったとき」があった。これらの作品が抽出し、描き出した場面・出来事はそれぞれ異なるが、共通して強く訴えているのは「二度と戦争をしてはならない」ということである。戦争のない地に生まれ、平和を当たり前に享受する日本人に対し、これから起こり得る悲劇を危惧して、あるいは常に危険と隣合わせに生きる紛争地域の人々に対し、愚かな争いはやめるようにと、いかなる立場や年齢、環境にある人であっても、戦争を経験した者の声に耳を傾け、その言葉を重く受け止める必要がある。

過去から学ぶ、政治参加に努める、今起きている現状を知る。情報が一個人によって発信される時代、瞬時に共有されるような社会に生きる私たちにとって、平和への思いを行動にすることは、決して難しいことではないだろう。戦禍を経験した人々から私たち、そして次世代へ、永続的な平和の実現を求める心を強く持ち続けたい。

＊編集部註

志村真帆子さんは2021年、お母さんの志村祥子さんとともに、アジ風の理念に共感して一緒に入会されました。真帆子さんは出版や編集に関心があり、昨年、アジ風新聞の編集委員募集に名乗りを上げて、現在は編集作業に加わっています。４年生の現在は出版関連の会社でインターンシップ中。将来はプロの編集者を目指しています。

積極的な異文化交流を通じて平和を実現しよう

段　安苗
アジ風歴２年　島根在住
島根大学大学院修士課程

交換留学のおかげで一度ポーランド、ベトナムの友達と一緒に広島に行ったことがある。今回アジ風により主催された創立記念イベントで学生たちの朗読を聞いて、広島のことを思い出した。　あの時私たちは、笑ったり話したり厳島神社で観光したが、原爆ドームと平和記念公園に行ったら三人が何も話していなくてただ沈黙だった。廃墟の前に立って何を話せば亡者を喜ばせるのだろう。

私は中国北西部の内陸で成長したのだ。シリアもウクライナも遠すぎて戦争の気配が感じなくて、世界は平和だと思った。「戦争が始まったら、ウクライナにいる親友は連絡できなくなりました。今はどうなっているのでしょう」と、ポーランドの友人の嘆声を聞いて初めて、戦争は自分に近いと思うようになった。なぜ自分はそう思うのだろう。ポーランドは戦争の中心地ではないのに、私の友人は実に苦しみを感じた。ウクライナで留学している中国のインフルエンサーは、学校が爆撃を受けて退学した。もし戦争地での就学が難しいなら、教育の貧しさから貧困が生まれるだろう。だから、戦争は貧乏、恨みと苦しみの原因の一つとして、全世界に影響を及ぼすと思う。

どうやって問題を解決するのだろうか。20 周年記念イベント当日は異国の学生たちに質問をして交流ができてとてもうれしかった。留学生として、今まで多くの海外の方々と交流ができて、この世界をもっと知って、本当に感謝の気持ちを持ってうれしかった。そうだ、コミュニケーションをより深めることで敵同士の恨みが溶けるかもしれないのではないだろうか。「相互理解を深めることによって、多文化共生社会の実現を目指し」とは、アジアの新しい風の目指しであり自分のそれでもある。

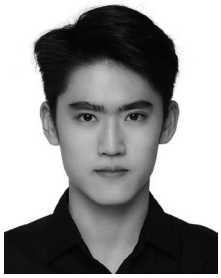
交換留学に続いて、今秋、日本の大学院に進学する。これからも外国の方々との交流を通じて、もっと自国のことを話したい、もっと外国のことが知りたい。世界中の国々の学生と一緒に座って交流するシーンはより多く見るためには、留学生として積極的に各種各様の異文化コミュニケーション活動に参加したい。

＊編集部註

段さんは、中国寧夏大学で日本語専攻時、文科省の日本文化研修留学生とし島根大学へ留学。タマサート大学のタイ人友人を通じてアジ風を知り、昨年７月から学生会員として入会。短い間に、ジェンダーに関するパネルディスカッション参加や、新春交流会、創立記念イベントの ZOOM 入室など積極的に参加し、今回の感想文にも応募してくれました。今秋からは島根大学院修士課程へ進学。これからの活動に期待しています。

戦争文学の持つ力

汪　極超
アジ風歴２年　横浜在住
慶應大学経済学部２年生



「君死にたまふことなかれ」は与謝野晶子が自身の弟を思って書かれた詩である。好きだからこそ憎らしいのように、ひとりの人でも、心には様々な感情があり､時には相反する二つの気持ちを抱いている。心の中で、人間の感情があまりにも複雑に錯綜しているため、科学的に解明するにはどうしても無理がある。そのような千々に乱れているものを扱うのが「詩」である。

「君死にたまふことなかれ」は日露戦争に出征した弟に「生きて帰って来てほしい」という心を歌った詩である。当時の多くの日本人女性は同じような気持ちを持っていた。与謝野晶子は彼女たちの代弁者として、この有名な反戦詩を書いた。

金さんが述べたように、この作品は、与謝野晶子の弟への思いと家族愛、そして戦争に対する嫌悪の気持ちを強く表現している。また、この作品を通じて、与謝野晶子は他人の批判を恐れず、自分の本当の気持ちを率直に伝えた。たとえどんな時代に生きていても、他人の目を気にせず、自分の考えを正直に周りに語ることができる力が大切であろう。金さんはこの作品に反戦主義だけでなく、与謝野晶子の勇敢さも読み取ったのはとてもありがたいと思う。

戦争文学は、戦争という極限状況における人間の善悪、勇気、苦悩、希望、絶望などの感情や行動を鋭く捉え、個人の体験や視点を通じて戦争の影響を探求する。「君死にたまふことなかれ」において、与謝野晶子は家族の悲しい感情と苦しみを描くことで、戦争の残酷さを浮き彫りにし、読者に深い感銘を与えた。また、戦争文学は、文学が持つ力を通じて、歴史の教訓を伝え、人間の本質と倫理的な問いに向き合う手段である。戦争の痛みや悲劇を体験することで、人々は共感と理解を深め、戦争を未来の世代に繰り返さないための意識を高めることができるのである。ウクライナ戦争などで世界の分断が進む中、戦争文学を読む重要性は一層高まるであろう。

＊編集部註

中国・上海の高校を卒業後、慶応大学経済学部へ進学。クラスメイトの紹介でアジ風へ入会し、すばらしい日本語力で日本人会員のみんなを唸らせています。まもなく入会後２年になりますが、登山や懸け橋Ｇの留学生たちとの交流も楽しんでいるようです。

鷗友学園女子中学高等学校

中学１年　筒井　菜穂子

私はアジアの新しい風 20 周年記念イベントに初めて参加しました。留学生の方々の詩の朗読とその解釈のスピーチを聞き、日本語が母国語ではないのに自分の考えや思いを日本語で相手に伝えられている事にとてもおどろきました。

最初は緊張しましたが、懇親会で留学生の方々と話してみたところ、とても気さくで話しやすく会話が楽しいと思いました。年齢、国籍、性別を超えて交流することは意外にも難しくはないのだなと思いました。このような貴重な機会に参加させていただきありがとうございました。

中学１年　知念　紗矢

留学生の方のお話のときの「武力で従わせるのが本当の強さではない。本当の強さとは他人や他の文化を理解してお互いを認め合うことだ。」という言葉がとても心に残りました。これは国同士の交流などの特別な場合だけでなく友達どの関係などの日常的なことでも言えると思います。宗教や出身地、母国語などが違うのに打ち解けてお互いに楽しそうにしている留学生の方のように、私も他人を認めてより仲良くなりたいです。他人を認めることは自分がやりたいことをやりづらくなることがあったりして決して簡単なことではないけれど、だからこそ一人でもそのような人がいればみんなの心の拠り所となりみんなが安心して生活できるようになると思うし、そういった人を通じてみんなの関係の幅が広がってとても楽しくなると思います。

また、もう一つの大きな学びは言葉についてです。母国語ではない言葉を話すときはミスをしてしまうことやイントネーションを間違えたりすることもありますが、多少のミスがあっても自分の考えを伝えようという強い意志があれば必ず伝わる、ということです。なので私達が今学んでいる英語も発音を間違えたりいい間違えてしまってもおどおどせずに伝えたいことを一生懸命伝えたいと思いました。様々な人と交流するこの会はとても新鮮で、今後に活かせる学びがあったので来年もまだぜひ参加したいです。

中学１年　鈴木　理咲子

外国人留学生がとても日本語が流暢で、話しやすかったです。私も英語を頑張って勉強したいと思いました。

留学生が、母国ではないのに日本についての知識が多く、すごいなぁと感心しました。平和をテーマとした詩を読んでいるとき、本当に心を込めている事が伝わってきました。

今回、外国から見た日本や、外国のリアルを知る事ができました。また、世代の違う方とも話すことができて、貴重な体験でした。外国人留学生がとても日本語が流暢で、話しやすかったです。私も英語を頑張って勉強したいと思いました。留学生も私が好きなキャラクターを知っていて、嬉しかったです。

中学１年　久芳　えり

私は、小学校の時タイに３年住んでいましたが、学校は日本人学校だったし、住んでいたアパートも日本人が９割ほどで、タイ人と話したことがほとんど無かったので、今回タイ人から日本や日本の文化がどう思われているかが知ることができてすごく面白かったです。また、機会があったら懇親会にも参加してみたいと思いました。

中学３年

外国の方が日本語を流暢に話していて刺激を受けたので、私も英語の勉強を頑張ろうと思いました。また、母国語以外を使って外国の人と平和について話し合えるのは素敵だと思いました。そして、平和を願ったり、争いはいけないものだと考えたりすることは簡単ですが、平和のために国際交流をする団体を立ち上げた人は凄いと思いました。今回の会には様々な国籍や年齢の人がいて、このような多様な人々で平和について話し合うことはとても良いと思いました。

中学３年　橋本　薫

私は特に，留学生の方々の詩の朗読に感動いたしました。本当に日本語が母国語ではないのか疑ってしまうくらい感情のこもった読み方でした。「君死にたもうことなかれ」など、読んだことがあるものもあったのですが，詩の意味をあまりわかっていなかったところも多く、詩の朗読を聴いてその意味が腑に落ちて、上手な詩の朗読だなと思いました。一体どのくらい日本語の勉強をしたのか知りたいと思いました。機会があればまた皆さんの朗読を聴きたいです。

高校１年　石井　結菜

今回、３人の留学生の方々の平和についての朗読・プレゼンテーションを聞き、「平和な世界」がどれほど幸せなことなのか、ということを改めて感じました。

特に印象に残ったものは「わたしが一番きれいだったとき」の朗読で、留学生の方から「自分が１番きれいだったとき」を自分に置き換えた時に、どのように表すことができるかという問いかけがあり、考えてみました。私がもし大人になって、人生を振り返った時には、「わたしが１番きれいだったとき　好きなものを好きなだけ食べられて　大切な人と好きな時に好きなだけ会えて、話せて　何にも縛られずに自由に生きることができた。興味があることは　何でもチャレンジできて　毎日が宝石のように輝いていた」と表すのではないかなと思います。留学生の方もおっしゃっていた通り、このようなことこそが平和な状態と言えるのではないかなと思いました。また、他の留学生の方がおっしゃっていたように、今私たちが平和で平穏な生活を送ることができていたとしても、世界のどこかには今も戦争で当たり前を奪われている人がいるということは忘れてはならないことだなと実感しました。

「アジアの新しい風」が設立されてから 20 年という節目の年のイベントに参加させていただき、平和を希求する人たちが設立したのがこの団体だということを知りました。これからは若い世代がその考えを引き継ぎ次世代に平和を希求する姿勢の大切さについて伝えていく役割を担うことが重要だと思いました。

また、留学生の方々はアニメに興味を持たれて日本語を勉強したとおっしゃっていて、外国語

学習において自分の興味が「学ぶ」ことに繋がることがあるのだなと知りました。また、日本語が母語ではないのに、とても日本語が上手で、「学ぶ」ことがどういうことなのかわかった気がします。私たちは、外国語学習として英語を今学んでいますが、留学生の方々の姿勢を思い出しながら今後も意欲を持って学習を続けていきたいと思いました。

高校１年　島村　香帆

日本とアジアの国々との繋がりを感じることができる貴重な体験でした。また、日本ではなく世界の国の価値観を感じることの出来る良い機会だったと思います。やはり、印象に残っていることは詩の朗読、またその感想です。「平和への誓い」、「わたしが一番きれいだったとき」、「君死にたまふことなかれ」どの詩も１度は聞いたことのある詩でしたが、身近な内容であるとは感じていませんでした。しかし、今回の朗読、詩に対する感想を聞き、まだ世界では戦争や紛争が起きている国があり、遠い昔のことではないと、私たちが解決しなければならない問題であると認識し、広い視野の必要性を改めて感じました。

高校１年　大角　夏菜

本日は素敵なイベントに参加させて頂きありがとうございました。平和のスピーチでは、同年代の学生さんの発表を聞きとても刺激を受けました。朗読で読まれていた詩は私も授業で習ったことがあったのですが、私が平和に対して思っていたことと同じで国が違えど平和観は似ているのだと思いました。

高校１年　水谷　優里

アジアの大学生の方３人の日本の詩の朗読、詩に対しての解釈・感想を聞き、日本で起こった戦争について詩を通して真剣に考えてくださっているのを感じ、とても心が温かくなりました。それと同時に、私自身も平和について改めて考える良い機会となりました。お話を聞いて、同じアジアでも考え方も文化も日本と他の国では全然違っているのだと思い、距離の近い国でも意外と知らないことも多いと気付かされました。これからはアジアの国について積極的に本を読むなどして知り、文化の違いを楽しんでいきたいと思います。

編集後記

8月の終わりに鹿児島県を訪ねました。19世紀末、日本の大きな変革となった明治維新と近代国家の成立に主要な役割を担った西郷隆盛、大久保利通、島津斉彬、小松帯刀など傑出した人物を輩出した県であります。彼らの生家や功績をたどった後、知覧を訪れました。

第2次大戦末期の特攻隊の基地だった知覧には、特攻平和記念館が建てられ、18歳から20歳代前半の若者たちが、出撃前夜に動揺する気持ちを抑えて書いた手紙や日記、そして遺品の数々、彼らの生きた証が丁寧に保存されていています。国のために、愛する家族を守るためにと信じていた若者たちの息づかいが聞こえるようでした。日本が狂気ともいえる戦略でアジアの国々を戦場にしたこと、将来を嘱望されていた優秀な若者が、理不尽な戦いにかり出されたこと、そして数え切れない多くの民の悲しみを私たちは忘れてはなりません。

アジ風が創立20周年に提示したこの企画は、戦争を知らない世代が大半になった今、改めて平和を考える機会となりました。アジ風の若者たちはこれらの詩を読んで、二度と愚かなことを繰り返さないと決意しています。現在、戦火に苦しんでいる人々に対して、私たちは何ができるのかを問いかけています。

遠くの国の戦争は人ごとではありません。身近なところで起こる可能性も秘めています。そのとき、私たちができることは声を上げることです。国を超えて人々が手を繋ぎ、平和を希求していきたいと強く願っています。

奥山　寿子

この夏、ウクライナ女性が俳句集『ウクライナ、地下壕から届いた俳句―theWings of a Butterfty―』を発行しました。彼女は「朝５時に爆弾の音で目が覚め、インターネットで戦争と知った。両親とチワワと一緒に地下壕に逃げ、日常が一変してしまった。ハルキウは攻撃にさらされ、３か月間地下壕生活が続いた」と淡々と語りました。その地下壕でロシア語で書き付けた俳句を日本の俳人とそのグループが翻訳した＜地下壕に紙飛行機や子らの春＞＜隙間風に揺れる燭の灯管制下＞＜いくたびも腕なき袖に触るる兵＞は、地下壕での生活や戦時下の情景が切り取られ、戦と隣合わせの緊迫感が具体的で、ぬるま湯の平和に慣れきった我が身を引き締めました。

1300年前の万葉集には、東国から遠く九州の最前戦へ借り出される民衆の歌が「防人歌」と収められています。望郷と妻や恋人、母父への想いを＜筑波嶺のさ百合の花の夜床にもかなしけ妹そ昼もかなしけ＞とちょっと頬を赤らめるほどの心情吐露や、別れの淋しさを動作に詠む率直な歌もあります。日常が非日常になる喜怒哀楽の心情は豊かに匂い続けます。

いずれの時代にも戦争があり、矢面に立つのは、海や山や民の命。その時々に必ずひりつき揺さぶられる詩歌が生まれます。「平和を希求する日本の民の心」コンテストでは３編の課題詩に、応募した各大学Ｉメイト学生の心が添い、低く鋭く平和を訴える心が溢れてゆきました。寄稿いただいたすべての人にも同じ灯が、戦なき世を照らしていると信じています。

『別冊』１９号を掌に受け読んで下さるみな様に、制作を引き受けて下さったＰＣＣ大洋の岡吉明さまに、こころよりお礼申し上げます。

原谷　洋美

M E M O

別冊 Iメイト便り 第19号

「Iメイト交流の愉しみ」

ーアジ風に乗って Iメイト交流はひろがるー

特集：平和を希求する日本の民の心

□ 発行日　2023年10月10日

□ 発行者　NPO法人
アジアの新しい風

〒154-0016
東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414
H　P：http://www.npo-asia.org
E-mail : new-wind2006@npo-asia.org

□ 制　作　PCC大洋